



全ての種を守る — 九大新キャンパス生物多様性保全事業の挑戦

や はら てつ かず
矢 原 徹 一

私たち人類は、自然を壊し過ぎた。私を植物学者へといざなってくれた実家の裏山は、瀟洒な住宅街へと姿を変えた。毎日のように遊んだ小川もアスファルトの下に埋められ、ナマズもドジョウも棲家を失った。そんな変化が、日本中で、そして世界中で起きた。その結果、地球温暖化に象徴される、生態系の異変が顕在化した。

もうこれ以上、自然を壊していけない。多くの人がそう思うようになった時代に、九大統合移転事業は開始された。275ヘクタールの里山を開発して、新しいキャンパスを作るこの事業は、相当な規模の環境破壊をせずには達成できない。時代を反映して、移転事業の理念の一つに「環境共生型キャンパス」がうたわれたが、果たしてどうすればこの理念を現実のものにできるのか。私は、造成開始が6月に迫った2000年の1月から、この課題に本格的に向き合うことになった。環境影響評価が実施され、さまざまな環境保全対策がすでに立案されてはいたが、生物多様性保全に関する調査・検討は、私の目には不十分に思われた。そもそも、どんな植物がどこに生えているかが、正確に調査されていなかった。また、地球温暖化対策として、森を増やそうという市民団体の取組みが活発化している中で、森林面積をどう確保するかについての計画が弱かった。そこで、「キャンパス内に生育している種の消



失を起こさない」「森林面積を減らさない」という目標を設定し、世界一徹底した生物多様性保全事業を推進することを心に期して、私の悪戦苦闘が始まった。

その後、多くの方々のご理解・ご協力を得て、九大新キャンパス生物多様性保全事業は着実に成果をあげてきた。新キャンパス用地では、左の写真のように、広大な造成地に高層ビル群が姿をあらわし、かつての里山景観は、大きな変貌を遂げた。しかしながら、造成地から「生物多様性保全ゾーン」と呼ばれる谷を下ると、上の写真のような森林が残され、春にはヤマザクラが咲いて美しい。夜にはタヌキやノウサギが駆け回っていることが、赤外線センサーカメラを使ったモニタリングで確認されている。6月には、ゲンジボタルが乱舞する。絶滅危惧種のカスミサンショウウオやニホンイシガメも棲息していて、これらについては市





民グループによる継続的な観察が実施されている。

九大新キャンパス生物多様性保全事業の一つの特色は、上の写真のように、特殊な重機を用いて森林を移植したことである。高木をそのままかかえあげて移植する方法に加え、森林植生を1.4m×1.4mのブロックに切り取り、土壌ごと移植する方法を採用した。生物多様性保全ゾーンと造成用地の境界斜面には、この方法で約1ヘクタールの森林が移植された。

このような移植作業の一方で、植物種に関する徹底した分布調査を実施した。その結果、キャンパス用地には約658種の植物が確認された。これらのうち、造成用地にしか分布しないものや、造成の影響を大きく受けるものについては、造成計画を微調整したり、個別に移植を行ったりして、1種も減ぼさないための真剣な努力を続けてきた。

水生植物・水生動物の保全のためには、池の移設や新設という本格的な対策が採用された。

このような保全事業は、世界的にも注目されている。世界でもっとも権威ある学術誌 *Science* の7月16日号には、*Conservation takes a front seat as University builds a new campus* と題する記事が掲載され、九大の生物多様性保全事業が紹介された。

このように、徹底した保全対策を実施しているが、「守る」という行為だけでは維持できないのが、里山の生態系の特色である。もともと里山の生態系は、水田・畑地・果樹園・竹林など、さまざまな形で人間に利用され、下草刈りや間伐などの管理の下で維持されてきた。ところが、九大移転用地として土地開発公社が用地を取得して以後は、約10年にわたり、里山が利用されずに放置されてきた。その結果起きたもっとも顕著な変化は、竹林の拡大である。江戸末期に中国から持ち込まれたモウソウチクは、放置すればシイ・カシの林に進入し、自生の森林を枯らしてしまう。

このような竹林の拡大から森林を守るために、新キャンパス用地では、市民団体（福岡グリーンヘルパーの会）と、学内NPO（環境創造舎）が協力して、竹の伐採・除去作業を行なっている。さらに、新キャンパスの森でひろったどんぐりから苗を育てて森を作る「どんぐりの森をつくろう」計画を、小中学生に呼びかけて実施している。新キャンパス用地275ヘクタールのうち、99ヘクタールは保全緑地として残され、さらに22ヘクタールの造成のり面も、可能な限り樹林化していく方針である。生物多様性保全ゾーン入り口の造成のり面には、すでに小中学生が植えた1000本以上の苗が、すくすくと育っている。

このような新キャンパスでの取り組みを教育に生かすために、新キャンパスにおける森林や生物の保全をテーマにした少人数ゼミナールCを4年前から開講している。学内NPO「環境創造舎」では、このゼミのメンバーが活躍している。環境創造舎による環境保全型水田を作りなどに参加しながら、新キャンパスの生物を実際に調査し、保全計画を提案していくという実践的なゼミである。授業が1コマ増えるのは大変だが、毎年意欲的な学生に出会えるのは、楽しい。このゼミの卒業生が、九大新キャンパス生物多様性保全事業の将来をきっと支えてくれるだろう。（理学研究院）

